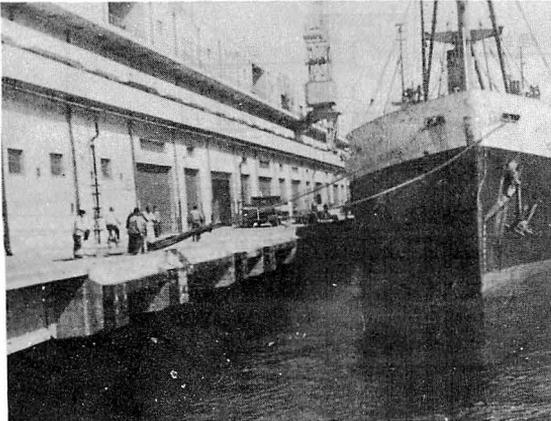


の上部に床を張り、海水は床下を自由に流通できる構造物である。耐久力の不足、船の衝撃にたいして弱い点が欠点である(図-2)。

物揚場とは舢(はしけ)が接岸荷役をする水深の浅いところで、舢に接する箇所はほぼ垂直に上面は斜面となっている。岸壁と物揚場との区別は水深約4.5mをもって境とし、これより水深の大きなを岸壁、小なるを物揚場と称している。

埠頭1m当り年間荷役能力は、取扱貨物の種類、埠頭の利用率および陸上設備の整備状況、臨港交通施設の能力および港湾の性格など各種条件で支配され、一律に定めることはできないが、普通標準荷役能力としては1箇年1m当り、雑貨埠頭は800t、



3. 神戸港第7突堤(西)西側
物揚場は400tくらいが普通である。(梶田 功)

ふとうりつ 不等率 (英) diversity factor いくつかの電気の需用があって、おのおの最大電力がわかっている場合、合成

された最大がおのおのの最大電力の算術和にはならない。これは各需用の最大に時間的なずれがあるためである。最大需用電力を生ずる時刻の相違にもとづく率を不等率といっている。例を変電所にとるとA,B,Cという3つの変電所があって、ピークがそれぞれXKW,YKW,ZKW、であってもA,BおよびCの変電所を連絡する送電線によって同時に供給する場合、ピークが(X+Y+Z)KWかかるかというそうではない。図で説明するようにWはX+Y+Zより小さくなる。つまり最大電力の出る時間帯がずれることにより、総合した場合の最大電力が小さくなるわけである。上記の場合 $\frac{X+Y+Z}{W} = \alpha$ とすれば、 α が不等率である。図により明かなように α は1より必ず大きい。幾つかの変電所に同時に供給する電源を考える場合、問題になるのは最大電力である。その際不等率がわかっておれば個々の変電所にかかる最大電力から総合の最大電力が簡単に求められる。総合最大電力は自家発電の場合では、電源設備の大きさを決める因子であり、購入の場合には需用電力

料金をきめる因子にもなっている。したがって適正な不等率を知ることは電力需給業務上大事なことである。

総合最大電力と個々最大電力の合計は、実績として求めることができるばかりでなく、実績をもとに列車ダイヤ等からも、ある程度正確に推定できるので、実際に近い不等率を求めることは可能である。

国鉄の直流変電所は不等率が相当大きくなっているが、電灯負荷の方は日没時間の同じ所ではほぼ1に近くなる。個々の最大需用が同時間にかかるからである。しかし夜間には荷役機械、工場等の設備が停止するので、それらの動力用の電力は少なくなるから、まとめて購入するようにすれば、契約電力は少くすむわけである。

